

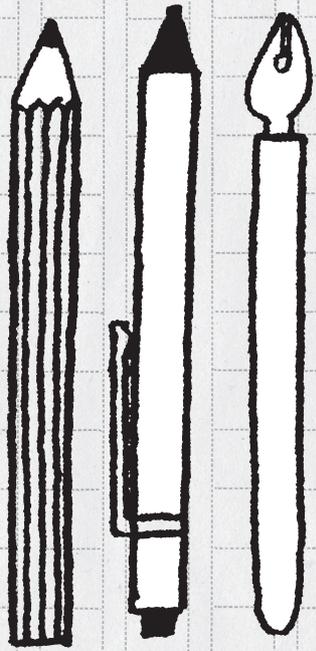
## 特集2

原稿用紙5枚で応募できる

# 文章公募

文章公募に挑戦してみたい！ そう思っている人にオススメの公募がある。エッセイや作文、体験記や手記、手紙といった公募だ。

書きやすいテーマが多く、さらに文章量も少ないなど、この分野は、公募ビギナー向き。文章公募へチャレンジするなら、このジャンルから始めてみよう。



デザイン・イラスト/ヤマグチカヨ  
取材 (p.28~30) / 山本竜也

## Chapter 1

ジャンルは多彩。身近なテーマでOK！  
5枚以内で応募できる  
文章公募に挑戦！

誰にでもあるエピソードの  
身近なテーマで作品を募る

今回の特集で取り上げる「原稿用紙5枚以内で応募できる文章公募」とは、本誌の文芸のジャンルに掲載されている「400字詰原稿用紙5枚以内、または1500字以内の文章程度」に該当する公募のこと。

主に手紙、メッセージ、エピソード、体験記・手記、作文、感想文、エッセイ、といったジャンルのもの。詩や短歌、俳句、川柳、童話、小説、ノンフィクション、論文などは除いている。

この条件のもと、ここ1年ほどの応募締切分のデータをまとめてみると、応募件数は117件。作品ジャンル別では、エッセイ・随筆が42%と最も多く、以下は手紙17%、エピソード13%、作文・感想文13%、メッセージ7%と続く（データ1参照）。

身近なテーマが多いのが特徴  
書きやすいテーマを選ぼう

テーマの内訳で最も多かったのは、特定の事例や事柄やもの・商品に関するも

ので38%。次いで家族・親子・恋人などに関するものが25%、3番目は感動エピソードで22%だった（データ2参照）。

特定の事例や事柄やもの・商品をテーマとするものは、商品PRを兼ねていることが多く、主に業界団体や企業が主催というケースが多い。「コーヒー」や「たまご」「着物」といった具体的なテーマもあるのですが、過去に体験して記憶に残っているエピソードなどで応募するというのも面白いかもしれない。

家族・親子・恋人をテーマとしたものは、心温まるエピソードが求められているので、「いつも思っていたけれど、照れくさくて言えなかったことを、思い切って伝える」といった素直な気持ちで書きはじめるのがいいかもしれない。

感動エピソードに関しては、高齢化社会を反映して介護に関するエピソード募集なども増えてきているようだ。

原稿用紙5枚以内で応募できる文章公募は、とにかくテーマが多彩。おもしろい体験談や感動エピソードなら、誰にでも一つくらいあるはず。そのエピソードに合ったテーマ探しから始めてみる。そんな手法もかなり有効で試す価値ありだ。挑戦してみよう。

## 自分の体験や思い出を綴って 入賞を狙おう

募集内容は、体験や思い出など比較的身近なテーマが多いようだ。その内容をジャンル別に分析してみよう。

### エッセイ・随筆

自分の体験や見聞きしたこと、主張などを自由に書いていくパターンが多いのがエッセイ・随筆。

テーマは自由という公募もあるようだが、主催者によってあらかじめテーマが決められているケースがほとんど。よくあるテーマとしては、子育てや家事などの日常生活に関するもの。最近では介護などのテーマも増えてきているようだ。また日頃愛用しているものや商品などに関するテーマも多く、自分の経験や思い出を綴っていくだけで文章化できるかもしれない。初心者には比較的取り組みやすいジャンルだ。

### 作文・感想文

作文もエッセイ同様に体験や主張を自由に書くというケースが多い。作文とエッセイに明確な違いはないので、主催者によって、エッセイという表記ではなく、より分かりやすい作文という表記にしている場合もあるようだ。

いっぽう感想文は、ある作家やあるジャンルの本を読んでその感想を書くといったケースが多い。

### 手紙・メッセージ

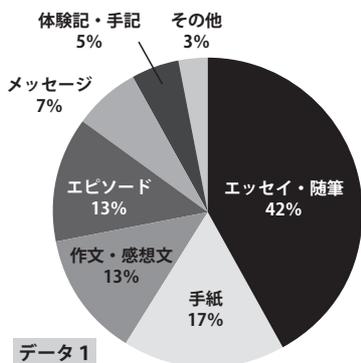
両親、子ども、夫や妻、恋人へといったパターンが多いのがこのジャンル。夫婦の日や孫の日、成人式などに合わせて開催される公募が多く、回を重ねた公募も多々ある。

他のジャンルに比べて文章量が少なく、1000字、2000字と限られた文字数で応募というケースもあり、自分のあふれる思いを短文の中にいかに凝縮していくかという難しさもあるようだ。

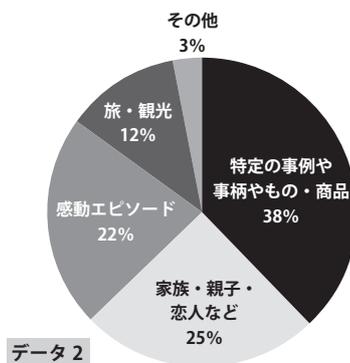
### 体験記・手記

このジャンルは、文字通り自分の体験や経験を綴るといふもの。実際に自分で体験したことに基づいて書き進めることができるので、初心者にとっては取り組みやすいジャンルのはず。

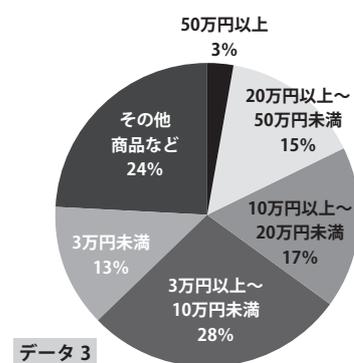
とはいえ、事実関係の記述に終始してしまったり、自己主張だけに終わってしまったり、読み手の心には届かないだろう。その体験を通してどう感じたのか、その後、自分がどう変化したのかといった視点に立つことも必要だ。また、自分の喜びや悲しみといった感情を押しつけ過ぎないように配慮したい。



募集ジャンルの内訳



募集テーマの内訳



賞金額の内訳

※賞金額には商品券、図書カードなども含まれます

## 今からでも間に合う文章公募

本誌10月号を手にした今からでも間に合う公募をいくつかピックアップして紹介。

公募名	主催者名	募集内容	賞金・賞品	締切	掲載ページ
第11回 二十四の瞳 岬文壇エッセイ募集	岬の分教場保存会	エッセイ(随筆)を募集。テーマは「父」「卒業」「言葉」から1つを選択。400字語原稿用紙3枚半～4枚。	最優秀賞1編＝20万円 優秀賞2編＝5万円 ほか	12月31日 (消印)	p.70
いい夫婦 ジュエリー 作文コンテスト2013	「いい夫婦の日」をすすめる会/ 日本ジュエリー協会	プロポーズや記念日の贈り物など、夫婦やカップルのジュエリーにまつわる特別な思い出を作文した作品を募集。文字数は400字以内。	入賞作品5点＝「エテルジュール」 ジュエリー(税込12万6000円)	9月30日	p.62
第17回 富士てがみまつり 手紙文コンクール	富士てがみまつり実行委員会	手紙の条件は「かぐや姫あての手紙」。テーマは「私と富士山」。富士山での思い出や体験したこと、学んだことなどを手紙文にしたもの。ハガキか400字語原稿用紙1枚以内。	かぐや姫賞1編＝3000円分の 切手ハガキセット ほか	9月23日～ 10月23日 (消印)	p.65
「ありがとうの手紙」コンサート ありがとうの手紙募集	滝沢ふるさと交流館	「ありがとう」をテーマにした手紙または詩を募集。文字数は400字以内。	採用20点程度＝ ありがとうの手紙コンサート 招待券 ほか	10月31日 (消印)	p.63
「私のBrilliant60sストーリー」コンテスト	あおぞら銀行	かつて熱中していたことの再開、あきらめられなかった夢の実現、新たな挑戦など、アクティブで光り輝く60代以上を過ごしている人、またはそれに向けて活動している50代の人のエピソードを募集。文字数は400字程度。	Brilliant60s大賞2編＝ 商品券30万円分 ほか	9月30日 23時59分	p.62

## Chapter 2

創作、入賞のヒントを探る  
主催者に聞く  
入賞のポイント

ジャンル 手紙

### 一筆啓上賞 日本一短い手紙

主催 坂井市／丸岡文化財団

大賞（日本郵便株式会社 社長賞）

前回テーマ

「ありがとう」

「おとうと」へ

まねするな。くつつくな。すぐよぶな。でも、そばにいてくれてありがとう。心強いよ。

おかざきまこ 8歳 福井県

「母」へ

母ちゃん。生んでくれて ありがとう。今日も弁当、少し、味濃いよ。

野口宗太郎 18歳 熊本県

「校長先生」へ

どうぞうをたおしてしまったぼくのために、あちこちでんわしてくれてありがとう。

柿本恭佑 6歳 和歌山県

「赤ちゃん」へ

仮施設内に、元気な赤ちゃんの声が届くようになった皆で耳をかたむける。ありがとう。

近藤孝悦 69歳 宮城県

「おばあちゃん」へ

私に色々なことを教えてくれたおばあちゃん。最後は命の儂さを。本当にありがとう。

西尾萌香 15歳 愛知県

誰にでも共感してもらえ  
普遍的なテーマを持つ「手紙」を

2003年、「日本一短い『母』との往復書簡」としてスタートし、前回募集で通算20回目を迎えた「一筆啓上賞」。

「前回テーマとした『ありがとう』は、この公募への20年間のご支援に対する感謝の意味でもあったんです」

（主催の丸岡文化財団常務理事兼事務局長、大廻政成さん）

文章公募プームの先駆けともいえる同賞には、20回通算で百万を超える作品が集まった。海外からの応募も多く、多くの国のメディアで取り上げられた。

「公募としての鮮度を保つために、10年区切りでやり方を見直してきました。」

どの回でも、受賞作品に共通して言えるのは、『この手紙なら、誰にでも共感してもらえ』ということ。過去にも未来にもつながる普遍的なテーマを持つ作品ですね。前回の受賞作もまさにそう。肉親への愛情、命の誕生への感謝、死への崇高な想い、教育というテーマ。大賞作品はどれも、胸に沁み入る『ありがとう』が詰まっています。

2011年の募集では、別のテーマが決定して、ポスターも刷り上がっていたが、東日本大震災を受けて、急遽、テーマが変更されたという。

「あの震災以来、大賞5作品のうち、必ずひとつは震災がらみのものが入っています。私たちも、審査をする方も、何度も被災地に足を運んでいます。忘れてはいけないことを、

#### 募集内容

テーマに沿った片道手紙文を募集。表現方法は自由。  
現在募集中のテーマは「わすれない」。

#### 応募数

63,745編（前回）

#### 賞・賞金

大賞 5編＝10万円 日本郵便社長賞5編＝3万円相当の記念品 秀作10編＝5万円 日本郵便北陸支社長賞10編＝1万円相当の記念品 住友賞20編＝5万円 中央経済社賞10編＝3万円 ほか

第21回募集中 詳細は65ページ参照。

日本一短い手紙  
21  
一筆啓上賞

わすれない。

公募 締切 2013年11月15日（金）

応募資格 日本在住の18歳以上の個人（法人・団体は不可）  
応募期間 2013年11月15日（金）正午まで  
応募方法 日本郵便の「郵便ポスト」に投函  
応募料 応募料は無料です（送料は自己負担）  
賞金 大賞5編＝10万円、日本郵便社長賞5編＝3万円相当の記念品、秀作10編＝5万円、日本郵便北陸支社長賞10編＝1万円相当の記念品、住友賞20編＝5万円、中央経済社賞10編＝3万円、ほか  
お問い合わせ先 丸岡文化財団事務局（〒910-0001 福井県坂井市丸岡）  
TEL: 077-474-1111 FAX: 077-474-1112  
E-MAIL: info@maruoka.or.jp

丸岡文化財団事務局 TEL: 077-474-1111 FAX: 077-474-1112 E-MAIL: info@maruoka.or.jp

丸岡文化財団事務局 TEL: 077-474-1111 FAX: 077-474-1112 E-MAIL: info@maruoka.or.jp

丸岡文化財団事務局 TEL: 077-474-1111 FAX: 077-474-1112 E-MAIL: info@maruoka.or.jp

丸岡文化財団事務局 TEL: 077-474-1111 FAX: 077-474-1112 E-MAIL: info@maruoka.or.jp

忘れないために。現場を知らなければ書けない・選べない大賞作品が必ずあることに、注目していただけたらうれしいです」

今回、賞名は前回までの「新・一筆啓上賞」からオリジナルの「一筆啓上賞」に戻し、通算の「第21回」という表記にした。テーマは「わすれない」。

「人にあるがとうと言う、目と目を合わせて会話する……なんとなくわすれてしまっているそんなことを、ぜひ思い出して書いてみてください。あたりまえの日常の中に置いてきってしまった『わすれ物』を、取り戻す機会にしてもらえたら幸いです」

「看護の日・看護週間」中央行事「忘れられない看護エピソード」募集

主催 厚生労働省／日本看護協会

最優秀賞 一般の部

「光が差した瞬間」

楠由美 奈良県

「この子と一緒に死のうか……」。そんな思いが何度も頭をよぎるほど、当時の私は心身ともに疲れ果てていました。息子がアトピー性皮膚炎と診断されたのは生後6カ月の時。行き先も告げられず、急に暗いトンネルの中に放り込まれた気分でした。

息子は全身のかゆみから、抱っこしても昼夜を問わず泣き叫び、引っかき傷が絶えず、身に着けるものやシーツは毎日血だらけ。寝る時は背中を何時間もさすり続け、やっと寝たと思えばかゆみでまたすぐに目を覚ます……そんな日々が3歳になるまで続きました。

顔の湿疹が目立つたため、道を歩いていると「わあ、汚い」「それうつるの?」。そんな言葉を時々掛けられることもありました。周りに同じ疾患の子はいなかったため、悩みもなかなか分かってもらえず、迷い込んだこのトンネルには出口なんてない……。そう思っていました。

そんな時、転居先で初めて訪れた病

院で、看護師のNさんに出会いました。診察で医師と私のやり取りを見ていたNさんは、「お母さん、いっぱい病氣や薬の勉強したのね。すごい」。笑顔でそう言い、「お母さんもK君も今まで頑張ってきたね」と誰も触りたがらなかった息子の手をぎゅっと握ってくださいました。

私は急に力が抜けて、気が付くと涙がぼろぼろこぼれて止まらなくなっていました。不思議そうに私の顔を見上げる息子と、驚きながらも背中を優しくさすってくださったNさんの手のぬくもりを今でも忘れることができませぬ。

「頑張つて」と、いつも言われてきた私にとって、「今まで頑張ってきたね」というNさんの言葉は、長いトンネルに初めて差し込んだ光でした。私たちが親子の存在を認めてもらえ、救われた気がしたのです。Nさんの言葉（光）を支えに、今も一進一退しながらも中学生になった息子と前に進んでいます。

私は2年前に看護学生となり、今Nさんのように誰かの力になりたいと看護師を目指しています。

誰の中にもある「看護」の思い出を、素直に綴ってみたい

ナイチンゲールの誕生日である5月12日は「看護の日」。その日を含む日曜・土曜までが「看護週間」とされている。その中央行事として厚生労働省と日本看護協会が主催しているのが、この公募である。日本看護協会広報部・木村弥生さんのお話。

「もともと企画の始まりにあったのは、『患者さんからのお手紙』です。看護職（保険師、助産師、看護師など）にとって、患者さんからのお手紙は、仕事でくじけそうになったときに、一番の励みになるもので、大切にしている人がほとんどです。手紙に記されているような、看護師と患者さんの触れ合いについての描かれたエピソードを集め、看護に関わるすべての人たちにとっての『励み』としていただきたいかった」

選考は、一次、二次を経て、特別審査員の内館牧子さん（脚本家）、ゲスト審査員、厚生労働省・日本看護協会関係者などによる最終選考まで、三次に渡って行われる。

「加点方式で選考が行われます。やはり最終まで残ってくる作品はどれも心にせまるものがあります。審査する側も改めていろんなことに気付かされますね。」

医療安全、倫理基準など現代と状況が異なる描写などについては、若干の修正をご相談させていただきます。

辛いとき、看護師からの言葉に支えられ、看護の道に進んだ人もいます。看護する側にとっても、される側にとっても、いろんな意味で

心に残るエピソードが、数多く寄せられる公募である。

「それまでの受賞作品のパターンを踏襲しているものが、少し増えているかな? という気はします。もっと、自由な物語を綴っていただきたいです。看護職を美辞麗句で持ち上げる必要はありません。やさしくて親切なだけが看護職の仕事ではない。時には退院後の生活環境を考えて、あえて自立を促し、『見守る』こともある。そんなエピソードも読んでみたいですね。素朴だけどリアルな、現場が思い浮かぶとおきのエピソードをお待ちしています」

今年の授賞式では、女優の若尾文子さんが受賞作品の朗読を行った。

「今年は、若尾さんの中高年のファンで会場は満員でした。やはり女優さんに朗読していただく、作品の沁み入り方が違いますね。それも、素晴らしいエピソードがあつてのと。看護の現場も病院だけでなく、地域、在宅など、さまざまな活躍の場が広がっています。きつとどなたの中にも必ず、『忘れられない看護エピソード』はあるはず。ぜひ、振り返って綴ってみて欲しいですね」

募集内容

「看護の心をみんなの心に」をテーマに様々な事業を実施している日本看護協会では、「看護」を通して得られた忘れられない思い出やエピソードを募集。看護職部門、一般部門の2部門。

応募数

3,419編（第3回）

賞・賞金

最優秀賞各部門1編=20万円 内館  
牧子賞各部門1編=10万円 優秀賞  
各部門3編=3万円 ほか

※2014年度の募集は11月頃を予定。

## 愛と義のまち米沢 エッセイコンテスト

主催 米沢市観光キャンペーン推進協議会

### 金賞

### 「渡る傘」

吉田尚乎 東京都

その日、取引先で打ち合わせを終えた私は急いでオフィスを後にした。ビルを出たところで、突然、激しい雨が降ってきた。仕方なく元居たビルに戻り、ひさしの下で雨宿りすることにしたのだが、余りにも突然の事に、途方にくれてしまった。

直ぐに止むだろう……と思ったのもつかの間、止む気配はない。走って駅まで行こうかとも思ったが、十分はかかる道のりと、強い降りに決断ができずにいた。

もう一人、雨宿りをしている青年がいた。ジーンズにTシャツのラフな格好で、この雨に慌てる素振りもなくタバコを吸っていた。それもそのはず、彼はタバコを吸い終わると隣のカフェへ入っていった。カフェの店員が休憩してただけだった。

「なんだ」。同じ境遇で困っている？」と思っていたので、困っていない彼を羨ましく思いながら、戻っていったカフェを眺めていたら、傘を差

した人がお店から出てきた。お客が帰るのだと思ったら、タバコの店員だった。「どうぞ」おもむろに傘を私に差し出しながら言った。「急な雨でお困りでしょう。ずっと前にお客様がわすれていった傘なんです。もう時効だから、お持ちください」。……ありがとう」私がポカンとしながら傘を手にとると、店員さんはそのまま雨の中、お店へ戻っていった。

たくさんの人達が濡れながら駅へと走っていく中、私はその傘のおかげで濡れずに駅まで辿り着くことができた。

駅では突然の雨で外に出られない人達がたくさんいて、あきらめて飛び出していくスーツ姿の人もいた。そんな中、困りきった様子で空を眺めているお婆さんがいた。私は迷わず手に持っていた傘を差し出した。「この傘は、さつき親切な店員さんにいただいたものです。私にはもう必要ありませんから、お使いになりませんか？」

数ヶ月前に雨から持ち主を守った傘は、私を助け、そして今、別の人のその役目を継続する事になった。人から人へ渡る傘。私の心は晴れていた。

「人に親切にされてうれしかった」  
その体験談と気持ちをそのままに

上杉謙信の故事から生まれた「敵に塩を送る」。上杉の城下町・米沢市では、いまも、謙信が重んじた「愛と義の精神」が脈々と受け継がれている。その精神を800字のエッセイに込めるコンテスト。主催の米沢市観光キャンペーン推進協議会事務局米沢市商工観光課・安部太一さんにお話を聞く。

「本市に今も残る『人にやさしく』の心を、全国のみなさんにお伝えしたい。そんな街であることをより多くの方に知っていただきたい。そんな思いが、このエッセイ公募をスタートさせた端緒です。全国各地で体験された『愛と義のエピソード』と、米沢の街で感じた『やさしさ』を、たくさんお寄せいただきました」

応募は全国各地から寄せられた。特に近畿圏からは、学校単位での応募も多く、若年層が感じる「愛と義の精神」に、審査員が感じ入る場面も多かったという。

「金賞受賞作の選考理由は、何よりもまず、内容・エピソードの『強さ』だったと思います。インパクトを保ちつつ、文章全体が、適度な起伏を持ちながら整っていて、具体性、意外性、真実性に富んだひとつの物語になっている」

審査は、事務局で数十点に絞った後、4名の審査員により、各10点満点の採点で行われた。

「金賞受賞作は、一次審査で読ませていただいた時から、読みやすさと話のおもしろさで、目についていましたね。審査員に見ていただく前に、数十点に絞る段階で注意するのは、

文章がきちんと整理されているかどうか、リズムよく読み進められるか、というところ。同じようなエピソードが複数あったり、『あれ？』この話、聞いたことがある』というような類似作品は、この段階でできるだけ除外するようにしています」

公募のテーマが、「いい話」であればあるほど、「どこかで聞いたようなエピソード」の応募率は高くなるもの。審査する側もこの辺りは留意しているので、こうしたエッセイ公募への応募の際には、オリジナル性には注意を払うべきだろう。

「他人にやさしくされた、心に残る本当の『体験談』を、自分の言葉で、飾ることなく原稿用紙に起こしていただければ、しっかりと伝わるものだと思います。実際、大部分はそういった作品で、読ませていただいて、温かい気持ちになれるものばかりですから。

個人的には、できれば米沢におこしいただいて、今もちゃんと残っている『愛と義の精神』を体感してもらってから、原稿に取り組んでいただければうれしいですね。お待ちしています」

#### 募集内容

親切にされたちょっといい話、世のため人のため義を感じたエピソード、心に残る米沢体験談を募集。

#### 応募数

200編（第2回）

#### 賞・賞金

金賞1点=米沢牛ギフト券1万円分  
銀賞3点=米沢牛ギフト券5000円分  
銅賞6点=米沢の特産品 3000円相当

※第3回(2013年度)の募集は10月頃を予定。